

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## On the "negative usage" of motto

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐野, 由紀子, SANO, Yukiko メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00002119">https://doi.org/10.15084/00002119</a>

# 「もっと」の否定的用法について

佐野 由紀子

(群馬県立女子大学)

## キーワード

比較表現, 「もっと」, 否定的用法, 程度用法, 比較基準

## 要旨

「もっと」は通常、程度性を持つ語を修飾する。そのため、従来「もっと」を含む比較表現は、程度の大小関係を表すものであると考えられてきた。しかし、実際には程度の大小関係を表すとは言えない働きを持つ場合がある。本稿では比較基準の状態に注目して「もっと」を2つに分類し、「もっと」には「程度用法」と「否定的用法」という2つの用法があることを述べる。「程度用法」は二者の程度の大小関係を表すのに対し、「否定的用法」は一方を否定しもう一方を適当な値として捉える働きを持つものであり程度の大小関係を表さない。それぞれの用法における相違は、単に意味だけではなく、韻律や構文においても見られる。またこのような相違は、「もっと」の使用条件にも影響を及ぼすものである。

更に、「もっと」を含まない比較表現においても程度の大小関係を表さない場合があり、このとき「もっと」の「否定的用法」と同様の意味・構文的特徴を持つことを述べる。

## 0. はじめに

一般に比較表現は、次の例のように形容詞を中心とする述語が表す属性や状態について、程度の大小関係を述べる時に用いられる（以下「程度の比較」と呼ぶ）。

(1) 硫酸ミストは、噴火して半年ほどでなくなる火山灰よりも気候に与える影響は大きいとされている。(朝日1993.3.6)

(2) われわれの手を借りず、自らその必然に従って行動し変化して行く。どんなゲームよりも複雑で、決して見飽きるということはない。(安部)

しかし、「程度の比較」ではないにも関わらず、比較表現が用いられる場合がある。

(3) 遊び場を引っ越し先の近くに求めるより、以前の遊び場に歩いて通う方を選んだ。

(4) が、私のやりかたとして、あれもこれもとりあげて総花的になるよりも、恣意的に作品を選んで直感の密度をあげるほうをとる。((3)(4)安達2001より)

(3)(4)について安達(2001)は、「どちらかを選ぶことでもう一方を否定するという意味を持つ」こと、また「意味的に「XでなくY」構文に近く、この構文と同様、語順が固定されている」ことを指摘している。

(3)' \* 以前の遊び場に歩いて通う方を、遊び場を引っ越し先の近くに求めるより選んだ。

(4)' \* が、私のやりかたとして、恣意的に作品を選んで直感の密度をあげるほうを、あれも

これもとりあげて総花的になるよりもとる。

「もっと」を用いた比較表現も、典型的には属性や状態（以下「属性」は省略し「状態」で代表させる）の程度を比較するとき用いられる。

(5)引退表明の時「14年間、つらいことが多かったが、親方（佐渡ヶ嶽親方）はもっとつらい思いをしてくれよう」と言っていた。（朝日1985.11.25）

(6)「まあ、勝手にしろよ。この鯨もかなりうまいけどね。僕はもっとおいしいもん食ってるなあ」（太郎）

その一方で、次の(7)(8)のような例も見られる。これらは、「もっと」を含まない比較表現のうち(3)(4)のような例と同様に、「一方を否定する」という意味を持つ。

(7)「あんたも、こんな割の悪いことをいいかげんでやめて、もっとうまい方法を考えなさいよ」（ポッコ）

(8)たしかに給料は悪くない。しかし単なる使用人扱いは言語道断だと思う…（略）…何かもっと適切な表現があったはずだ（安部）

(5)(6)の「もっと」と(7)(8)の「もっと」は、「更に」という副詞との置き換えの可否によって区別することができる。(5)(6)は「更に」に置き換えられるが、(7)(8)は「更に」に置き換えることができない。

(5)′引退表明の時「14年間、つらいことが多かったが、親方（佐渡ヶ嶽親方）は更につらい思いをしてくれよう」と言っていた。

(6)′「まあ、勝手にしろよ。この鯨もかなりうまいけどね。僕は更においしいもん食ってるなあ」

(7)′ \* 「あんたも、こんな割の悪いことをいいかげんでやめて、更にうまい方法を考えなさいよ」

(8)′ \* しかし単なる使用人扱いは言語道断だと思う…（略）…何か更に適切な表現があったはずだ

程度の比較を行う典型的な比較表現を「XはYより（もっと）A」（或は「YよりX（の方）が（もっと）A」）のように示すとき<sup>1</sup>、以下ではXを〔比較対象〕、Yを〔比較基準〕と呼ぶことにする。述語部分Aは程度性を持つ語（「程度述語」と呼ぶ）となる<sup>2</sup>。

従来、比較表現は〔比較対象〕と〔比較基準〕の状態の程度を比べるときに用いられると考えられてきたが<sup>3</sup>、安達(2001)は比較構文の様々なタイプについてその全体像を提示し、上の(3)(4)のような例では比較構文が一方を否定する意味を持つことを指摘している。一方、「もっと」を含む比較表現については、(5)(6)のように〔比較対象〕も〔比較基準〕も共にAという状態である場合と、(7)(8)のように〔比較対象〕がAのとき〔比較基準〕は～A（Aでないことを～Aと表す）となる場合があり、後者の場合には〔比較基準〕を否定的に捉える働きがあることが指摘されている<sup>4</sup>。しかし、〔比較基準〕がAの場合も～Aの場合も、「もっと」は基本的に程度述語を修飾するため、〔比較基準〕を否定的に捉える比較表現が「程度の比較」以外のものとして、明確に位置付けられることはなかった。

本稿では、(3)(4)(7)(8)のような比較表現を「程度の比較」ではないと考えることによって、従来様々に述べられてきた「もっと」の性質、及び比較表現の性質の一端を明らかにする<sup>5</sup>。

## 1. 先行研究

本節では、「もっと」を用いた比較表現、特に「比較基準」が「A」となる場合と「～A」となる場合について、従来の研究とその問題点について述べる。

奥村(1995)は「もっと」について、「XはYよりもっとA」のとき「XがAであること」が「YがAであること」を大きく超えていることを表しているとし、Xだけでなく比較基準であるYの状態もAであるという前提が必要だと述べている。例えば次の(9)では、太郎だけではなく次郎も「背が高い」ことが前提となっていると考えられる。

(9)太郎は次郎よりももっと背が高い。

佐野(1998)でも同様に、(10)では「もっと」が用いられないのに対し、(11)のように「次郎も高い」という前提を加えると、可能になることから、「もっと」は「[比較基準]もAである」という前提が必要であるとしている。

(10)a: 太郎と次郎とどちらの方が背が高いですか。

b: 太郎の方が {??もっと/ずっと} 高いです。(10)(11)佐野1998より)

(11)a: 太郎と次郎とどちらの方が背が高いですか。

b: 次郎も高いですが、太郎の方が {もっと/ずっと} 高いです。

cf. 次郎は低いので、太郎の方が {??もっと/ずっと} 高いです。

しかしはじめに述べたように、「もっと」は「比較基準」が次例のようにAであるとは言えない場合に用いられることも、同時に指摘されている。「比較基準」が「Aであるとは言えない場合」には、(12)～(14)のように「比較基準」が～Aであると考えられる場合と、(15)のように「比較基準」が程度を想定できないものである場合とがある。

(12)この店の料理は (今はおいしくないが) 昔はもっとおいしかった。

(13)a: 彼は160センチくらいですか。

b: いいえ。もっと高いですよ。

(14) (のろのろと走っている人に対して) もっと速く走れ!

(15) もっと他に方法がある。(13)～(15)佐野1998より)

佐野(1998)では、(12)～(15)のように「話題になっているY、或いは現状を否定し、Xはそれ以外であること、或いはそれ以上であるということ」を「もっと」の「否定的用法」と呼び、Xだけでなく比較基準であるYの状態もAとなる(11)bのような例とは別用法と考えた。「否定的用法」の場合には、「[比較基準]もAである」という前提は必要ない。佐野(1998)では「否定的用法」について、どのような場合にこの用法が用いられるのか、またどのような特徴を持つのか、など詳しい説明は述べていない。

一方、木下(2001)では、「視点」という概念を使って、「比較基準」=Aとなる「もっと」と、「比較基準」=～Aとなる「もっと」を統一的に説明しようとしている。木下は、「視点」を「話

し手の空間的・時間的・心理的現在地である」と定義づけ、「現在・現実・現場の状態や、談話の中で比較の直前の部分に示されている状態」(＝視点)が「もっと」による比較の基準となる、としている。従って、基準となる現在・現実・現場の状態が想定できるか、或は基準となる状態について前もって述べられていることが「もっと」の使用条件となり、「[比較基準]もAである」ことは「もっと」の本質的な性質ではないと考えている。次の(16)～(18)では、比較の直前に言及したこと(例えば(16)では次郎の背が高いこと)に視点があり、それを基準として[比較対象]について述べていることになる。また、(19)では現在の感覚に視点があり、それを基準に過去の感覚を比較しており、(20)では現実を持っているお金の額に視点があり、それを基準に現実には持っていない金額を願望しているということになる。

(16)次郎は背が高いけど、太郎はもっと背が高いですね。(16)～(20)木下2001より)

(17)当時このあたりは藪だらけだった。今はもっと開けているが。

(18)30年前は1ドル360円だったが、最近、円はもっと高くて、1ドル110円前後だ。

(19)(レストランで料理を食べながら)前に食べた時はもっとおいしかった。

(20)もっとお金があったらなあ。

[比較基準]の状態がAとなる「もっと」も、～Aとなる「もっと」も、共に何かをうけた上で述べるという点では共通しており、本稿での主張は、木下(2001)のいう「視点」という概念自体を否定するものではない<sup>6</sup>。しかし、「もっと」の本質を捉えるためには、「もっと」が常に程度の大小関係を表すものではないことを明確にすることが重要であると考えられる。以下では、[比較対象]と共に[比較基準]の状態もAとなる「もっと」と、[比較基準]が～Aとなる「もっと」では、程度の比較か否かによって、意味、韻律、構文などの点で明らかな相違が見られ、統一的に捉えることは困難であることを指摘し、「もっと」には「程度用法」と「否定的用法」という異なる2つの用法が存在することを述べていく。

## 2. 「程度用法」と「否定的用法」

本節では、「もっと」を2つの用法に分類し、それぞれの意味・韻律・構文的特徴について考察する。

### 2.1. 意味の特徴

既に述べたように、「もっと」を用いた比較表現には、[比較対象]だけでなく[比較基準]の状態もAとなるもの((21)(22))と、[比較対象]がAのとき[比較基準]は～Aであると考えられるもの((23)(24))とがある。

(21)「そうだ。かなり進歩している。しかし外国の進歩はもっと早い、ぐずぐずしているとヒマラヤの山々は全部、外国人たちにしてやられてしまうかもしれない」(孤高)

(22)「おなら」をするので、お嫁に行けないお金持ちの娘が、やっと、お嫁に行けたので、うれしくなって、結婚式の晩、いつもより、もっと大きい、おならをしたので、寝ていたオムコさんが、その風で、部屋を七まわり半して、気絶する、というような話だった。(トット)

(23) 「くそっ。なんだ、あのざまは、もっと勇ましくできないのか」ディレクターは舌打ちした。(筒井)

(24) 思春期の少年の淡い恋心といったものではなく、もっと狂おしいまでのひたむきな恋情でした。

(21)(22)と(23)(24)の間には、次のような意味的相違がある。まず、(21)(22)の「もっと」は、[比較基準]も[比較対象]もAという状態であり、連続するスケールの中でどちらの程度が上かという程度の大小関係を述べる。例えば(21)では、「自国の進歩」と「外国の進歩」を比べ、「外国の進歩」の「早さ」の方が相対的に程度が上であることを述べている。

これに対し、(23)(24)の「もっと」は、[比較基準]を否定し、[比較対象]を適当な値として捉える、すなわち、～AでなくAを適当な値として捉えるものであり、二者の程度を比較するものではない<sup>7</sup>。例えば(23)では、「勇ましくない」現状を否定し、「勇ましい」状態を適当であると捉える。また(24)は「淡い恋心」というのではなく「狂おしいまでのひたむきな恋情」といった方が適当な表現であると捉える。

はじめにも述べたように、(21)(22)のような「もっと」は「更に」に置き換えられるが、(23)(24)のような「もっと」は、「更に」に置き換えることができない。

(21)' 「そうだ。かなり進歩している。しかし外国の進歩は更に早い、ぐずぐずしているとヒマラヤの山々は全部、外国人たちにしてやられてしまうかもしれない」

(22)' 「おなら」をするので、お嫁に行けないお金持ちの娘が、やっと、お嫁に行けたので、うれしくなって、結婚式の晩、いつもより、更に大きい、おならをしたので、寝ていたオムコさんが、その風で、部屋を七まわり半して、気絶する、というような話だった。

(23)' \* 「くそっ。なんだ、あのざまは、更に勇ましくできないのか」

(24)' \* 思春期の少年の淡い恋心といったものではなく、更に狂おしいまでのひたむきな恋情でした。

前者((21)(22))は「程度の比較」を行うことから「程度用法」、後者((23)(24))は佐野(1998)と同様に「否定的用法」と呼ぶことにする<sup>8</sup>。「もっと」にこのような意味的相違が存在することは、以下のような現象からも確認できる。

程度副詞は、一般に(25)(26)のように程度性を持つ語と共起し、(27)のように、程度性のない語とは共起しない。

(25) サングの殻は炭酸カルシウムできており、非常にかたい。(ゾウ)

(26) 上記の地物によってくぎられる領域であるから、かなり広い面積である。(野の鳥)

(27) \* {非常に/かなり/もっと} {同時だ/正解だ/無料だ}。

しかし、渡辺(1986)が指摘するように、「もっと」については、程度性を持たない語のうち「別の」「他の」「違う」等、特定の語と例外的に共起することができる。

(28) 「でもね、同じ夢を買うなら、もっと (\*非常に/\*かなり) 別のボクサーが……。あなたの夢に、内藤君はふさわしくないと思うの」(一瞬)

(29) この言葉はいじめっ子のあいさつなんだから、しかたがない。もっと (\*非常に/\*かな

り) ちがった言葉を考え出せばいいのにと、時どき考えちゃうわ。(ボッコ)

(30) 書きたいことは、もっと (\*非常に/\*かなり) 他のことだったような気がいたします。

(錦繡)

「もっと」がこのような程度性のない語と共起するのは、「もっと」に「程度の比較」とは異なる用法が存在するためであると考えられる。そして、この「もっと {別の/ちがった/ほかの}」などは、[比較基準] 以外のものであることを述べるものであり、これは「[比較基準] を否定し、「比較対象」を適当な値として捉える」という「もっと」の否定的用法の意味と正に一致するのである。従って、「もっと」は程度副詞であるにも関わらず、なぜ程度性を持たない語と共起するのかは、否定的用法の意味を考えることで解決されるといえる。

## 2.2. 韻律的特徴

以上のような意味的相違に伴って、程度用法と否定的用法では、卓立という韻律的な特徴においても大きな違いが見られる<sup>9</sup>。次の①～⑥の例を20代女性15人に読んでもらい<sup>10</sup>、「もっとA」という修飾関係についてそれぞれピッチを調べてみると、話者によって多少の差はあるものの、程度用法と否定的用法では明らかな違いが見られた。

### <程度用法>

- ① 私自身の、手術の時の一時間は長かった。待っている一時間もながいかもかもしれないが、手術をされる身の一時間はもっと長いのだ。(草)
- ② 日本も素早い処置を取ったが、米国はもっと早い時期に対応した。
- ③ いつも大きい声で話す母親が、普段よりもっと大きい声で言った。

### <否定的用法>

- ④ 「うちは固いんです。父はむかし消防署にいたし、兄は警察官だし、それに母は私がミニスカートをはいても叱るような人だったから。もっと長いのになさい、って」(一瞬)
- ⑤ 「実際の損失を測るのが難しい」のが事実なら、なぜもっと早い時期に訂正しなかったのか。「遅すぎた訂正」は、ワインバーガー氏らタカ派の幹部の辞任と関係があるのかどうか。(朝日1988.3.23)
- ⑥ 「ええ、おい。一おい、なんだって、そう黙ってばかりいるんだ。」「…」「全体、おまえは、あれから、どうしていたのだ。一なに、もっと大きい声で言え。一恥ずかしい?バカな。おれの前で、恥ずかしいも何もあるものか。」「…」(路傍)

まず、程度用法の場合は、「もっと」のピッチが卓立しており、そのあとの形容詞のピッチは下降する。話者によっては、次の図1のように、形容詞部分の上昇が全く見られず、「もっと」と形容詞が一語化したかのように発音される例も見られた。また、形容詞部分の上昇がはっきり見られる話者もいたが、それが「もっと」のピッチ領域と同じくらいの高さまで上がる話者は皆無であった。

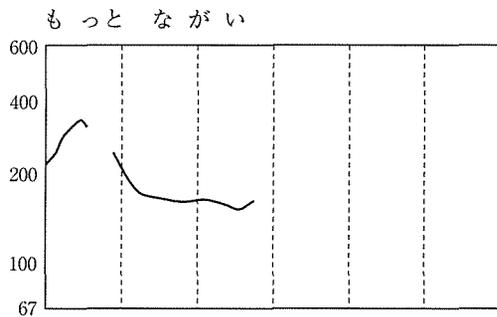


図 1

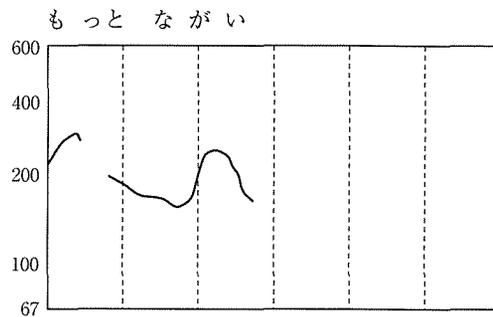


図 2

これに対し、否定的用法の場合は、ほぼ全員の話者が「もっと」のあとの形容詞のピッチが「もっと」とほぼ同じ高さまで上がる（図2）。

窪菌(1998)は、日本語の句構造では、通常前部要素が後部要素より高いピッチ領域に実現すると述べている。例えば、「うまいカレーライス」では、図3のようなピッチ曲線を描く。



図 3 (窪菌1998)

程度用法の「もっと+形容詞」はこの原則通りであるが、否定的用法の「もっと+形容詞」はこの原則と異なるものであり、後部要素に強い卓立が置かれていることが分かる。

このような結果は、既に述べた程度用法と否定的用法の意味的差異によって生じるものであると考えられる。すなわち、程度用法の場合には[比較対象]も[比較基準]もAという状態であり、[比較対象]の方が[比較基準]より程度が上であることを述べるものであるため、特に[比較対象]の状態が「Aである」ということを強調する必要はない。[比較基準]よりもはるかに程度が上であることを強調したい場合には「もっと」に強い卓立が置かれるか、「もーっと」と音を伸ばして述べることになる(従って、「もっと」に強い卓立が置かれたり、「もーっと」と音を伸ばして述べられるのは、程度用法の場合に限られる)。それに対して、否定的用法の場合には、「～AでなくA」と、[比較対象]は[比較基準]の値と異なることを述べるため、「もっと」の後ろに来る形容詞部分が強調されるのである。

以上のように、程度用法と否定的用法は卓立という韻律的な特徴においても明らかに区別される。

### 2.3. 構文的特徴

更に、程度用法と否定的用法では、構文的な違いも見られる。ただし「もっと」を含む比較表

現の場合、程度用法の「もっと」も否定的用法の「もっと」も通常、程度性を持つ語を修飾するため、構文的差異は見えにくい。したがって、まずは「もっと」を含まない比較表現について考えることにする。

### 2.3.1. 「もっと」を含まない比較表現

次の(31)(32)は、[比較対象]と[比較基準]の属性について、その程度を比較するものである。

(31)=(1) 硫酸ミストは、噴火して半年ほどでなくなる火山灰よりも気候に与える影響は大きいとされている。

(32)=(2) どんなゲームよりも複雑で、決して見飽きることではない。

これに対し、次の(33)～(36)は[比較対象]や[比較基準]である物や事柄について、[比較基準]を否定し[比較対象]を適当な値として捉えるという意味を持っており、程度の比較とは考えられない。

(33)「まあ、彼女の名前より、あなたの住所とお名前を教えてください。カルテを作らなければなりませんから」(ボック)

(34)=(3) 遊び場を引っ越し先の近くに求めるより、以前の遊び場に歩いて通う方を選んだ。

(35)『TUTU』以降のマイルスからは、あきらかに、サウンド・クリエイターとしてよりいちトランペッターとして音楽に取り組む姿が顕著に感じられる。(35)(36)安達2001より)

(36)いい年をして羞ずかしくないのかしらと呆れるよりも、まず目の前で行われていることが信じられなかった。

(33)～(36)の比較表現は、「[比較基準]より」が「[比較基準](の)ではなく」に言い換え可能であり<sup>11</sup>、また、はじめにも触れたように語順の変更ができない<sup>12</sup>。

(33)' 彼女の名前ではなく、あなたの住所とお名前を教えてください。

(33)" \*あなたの住所とお名前を、彼女の名前より教えてください。

上の(31)(32)のような比較表現と、(33)～(36)のような比較表現は、それぞれ「もっと」の「程度用法」「否定的用法」と同様の意味を持つ。従って、「もっと」を含む比較表現と同様に、それぞれを「程度用法」「否定的用法」と呼ぶことにする<sup>13</sup>。

「もっと」を含まない比較表現の「程度用法」と「否定的用法」は、その意味の違いに伴って、構文の上でも違いが見られる。まず、「程度用法」は[比較対象]と[比較基準]の程度を比較するため、比較のテーマとなる程度述語Aは、必須である(例えば、先の(31)では程度述語の表す「気候に与える影響の大きさ」について、「硫酸ミスト」と「火山灰」を比較している)。従って、程度用法では、

(37) [比較対象]は[比較基準]よりA (或は、[比較基準]より[比較対象](の方)がA) という構文をとる。

一方、否定的用法の場合、程度の比較を行うのではないため、程度述語を取る必要はない。先の(33)～(35)のように補語が[比較対象]になることもあるし、また(36)のように述語自体が

[比較対象] になることもある。しかしいずれの場合も「[比較基準] ではなく [比較対象] が適当な値である」ことを述べるため、[比較対象] と [比較基準] のみが必須の要素となり、

(38) [比較基準] より [比較対象]

という構文となる。

### 2.3.2. 「もっと」を含む比較表現

「もっと」を含む比較表現の場合も、「もっと」を含まない比較表現と同様に考えることができる。ただし、「もっと」は程度副詞であるという性質から、「別の」「他の」「違う」などに係る場合を除き、程度用法の場合も否定的用法の場合も常に、程度述語を修飾する。しかし、共に「もっと A (=程度述語)」という形を取っていても、程度用法と否定的用法では異なる構文であると考えべきである。

まず、程度用法の場合は、A という状態について X と Y の程度を比較する。例えば次の (39) では、「長さ」という比較のテーマに関して、「待っている一時間」と「手術をされる身の一時間」を比較している。

(39) 私自身の、手術の時の一時間は長かった。待っている一時間もながいかももしれないが、手術をされる身の一時間もっと長いのだ。(草)

このとき比較のテーマとなる A (=程度述語) は必須である。従って、「もっと」の程度用法は、

(40) [比較対象] は [比較基準] よりもっと A (或は、[比較基準] より [比較対象] (の方) が もっと A)

という構文をとる。

一方、否定的用法では「もっと A (=程度述語)」という形を取っていても、程度の比較を行うのではないため、A は比較のテーマとしては存在しない。2.1 節で述べたように、「もっと」の否定的用法は「~A でなく A が適当な値である」ことを述べるものであるため、

(41) (~A でなく) もっと A

という構文となる。このとき A (=程度述語) は、それ自体が [比較対象] となり、~A を [比較基準] とするため、(41)は、

(41)' ( [比較基準] でなく) もっと [比較対象]

のように表すこともできる。例えば次の (42) では、「割の悪い」が [比較基準]、「うまい」が [比較対象] である。

(42)=(7) 「あんたも、こんな割の悪いことをいいかげんでやめて、もっとうまい方法を考えなさいよ」(ボッコ)

「もっと」を含む比較表現の場合、[比較基準] を「~より」で表すと程度の比較と解釈されやすいため<sup>14</sup>、「もっと」の否定的用法では「~より」は現れないことが多いが、実質的には (41)'(「もっと」を含む比較表現の否定的用法) は (38) (「もっと」を含まない比較表現の否定的用法) と同様のものと考えられる。つまり、否定的用法は程度を比較するものではないため、A (=程度述語) は比較のテーマとして存在しえないのである。

程度用法が程度の大小関係を表し、否定的用法が[比較基準]を否定し[比較対象]を適当な値として捉える、という意味的な違いを考えることによって、以上のように、両者は構文の上でも異なるものであることが分かる。

以上をまとめると、以下のようになる。

◎「もっと」を含まない比較表現

程度用法：[比較対象]は[比較基準]よりA

(或は、[比較基準]より[比較対象](の方)がA)

否定的用法：[比較基準]より[比較対象]

◎「もっと」を含む比較表現

程度用法：[比較対象]は[比較基準]よりももっとA

(或は、[比較基準]より[比較対象](の方)がもっとA)

否定的用法：([比較基準]ではなく)もっと[比較対象]

(= (～Aでなく) もっとA)

### 3. 否定的用法の「もっと」の使用条件

では、どのような場合に否定的用法の「もっと」が用いられるのか。結論から先に述べると、否定的用法の「もっと」は、「具体的な事例の特定の状態」を[比較基準]とし、それを引き合いに出して「こんなふう (そんなふう/あんなふう)ではなくて、もっとA」と述べる表現である。従って、[比較基準]が特定の値を表す場合に「否定的用法」の「もっと」が用いられるといえる。以下では、「具体的な事例の特定の状態」とは具体的にどのようなものか、述べていく。

#### 3.1. 比較基準が特定の値を表す名詞句である場合

[比較基準]が「具体的な事例の特定の状態」を表すケースとして、第一に、[比較基準]が「特定の程度をともなった状態」を含意する名詞句となる場合が挙げられる。

(43)=(13)a：彼は160センチくらいですか。

b：いいえ。もっと高いですよ。

(44)私が買ったのは、フェラガモの靴ではなく、もっと安い靴だ。

例えば、(43)における[比較基準]である「160センチ」は、「身長の高さ」という程度スケールの中で具体的にどの程度なのかという特定の値を示すし、(44)における[比較基準]である「フェラガモ」も、具体的なブランド名を挙げることによって、「値段の高さ」という程度スケールの中で特定の値を示すものと考えられる。次の(45)～(48)も、「もっと」が名詞句の表す特定の値を[比較基準]とする例である。

(45)「モデルさんですか?」「もっと地味な仕事ですよ。」

(46)そして彼は自信をもっていた。条件はそろっている。三年も四年も待つ必要はない。もしも二人の間で既成の事実がつくられてしまえば、結婚はもっと早く実現させることができるだろう。(青春)

(47)=(17) 当時このあたりは藪だらけだった。今はもっと開けているが。

(48)=(18) 30年前は1ドル360円だったが、最近円はもっと高くて1ドル110円前後だ。

このように、否定的用法の「もっと」は「特定の程度をともなった状態」を含意する名詞句を[比較基準]とし、通常、形容詞のように連続的な程度スケールを想定できる語句を[比較基準]とすることはできない。

(43)′ a: 彼は背が低いですか。

b: いいえ。\*もっと高いですよ。

(44)′ \*私が買ったのは、高い靴ではなく、もっと安い靴だ。

例えば、「背が低い」ことを否定すると、「背が低くない」こと、すなわち「低い—高い」という連続的なスケールを持つ「高さ」という尺度においてその程度が小さい範囲でないことを表す。つまり形容詞を否定する場合、通常それは、ある一定の幅を持った程度を否定することになる。しかし否定的用法の「もっと」は、一定の幅を持った程度を否定するのではなく<sup>15</sup>、具体的な特定の値を否定する表現であるといえる。

また、「もっと」は既に述べたように、「～A (=比較基準)でなくA (=比較対象)が適当な値である」ことを述べるため、「特定の程度をともなった状態」とは「～A」と捉えられるものでなければならない。例えば先の(43)では、「160センチ=高くない」と捉えられ、(44)では「フェラガモの靴=安くない」と捉えられるため許容される。一方、次の(49)では、否定される「鈴木さん」は、それが特に何らかの属性を含意するとは捉えにくいいため、このような場合には「もっと」は用いられない。

(49) a: 彼は鈴木さんですか？

b: \*いいえ、もっと {背が高い/やさしい/細い} です。

次の(44)″のような場合にも、「フェラガモ」は通常「大きさ」という尺度で測りにくく、～A (=大きくない)と捉えられないため、許容されない。

(44)″ \*私が買ったのは、フェラガモの靴ではなく、もっと大きい靴だ。

以上のことから、～Aという「特定の程度をともなった状態」を含意する名詞句を[比較基準]とし、その値を否定する場合には否定的用法の「もっと」が用いられるといえる。

### 3.2. 比較基準が「実際に体験している(体験した)状態」である場合

[比較基準]が「具体的な事例の特定の状態」を表すケースとして、第二に次のような例が挙げられる。

(50) この店の料理は (今はおいしくないが)、昔はもっとおいしかった。

(51) そういえば昨日の夕食 まずかったんだ。いつもはもっとおいしいんだけど。

これらは、[比較基準]が「実際に体験している(体験した)状態」を表している。このように[比較基準]が形容詞(或いはその否定形)であっても、それが「実際に体験している(体験した)状態」である場合には、否定的用法の「もっと」が用いられるといえる。「実際に体験している(体験した)状態」が[比較基準]となるのは、「実際に体験している(体験した)状態」

とは具体的な状況が明らかであり、名詞の場合と同様に（名詞に準ずるものとして）「あんなふう（あんなふう）ではなくて、もっとA」と、具体的な特定の値を表すことができるためである。従って、次例のように「比較基準」が「実際に体験している（体験した）状態」とは考えられない場合には、「もっと」は用いられない<sup>16</sup>。

(50)′ \*この店の料理は今はおいしくないらしいが、昔はもっとおいしかった。

(51)′ \*そういえば昨日の夕食まずかったみたいだね。いつもはもっとおいしいんだけど。

1節で触れた木下(2001)のいう「現在・現実・現場の状態」とは、具体的な値が明らかであり、「実際に体験している（体験した）状態」の典型例であると考えられる。このため、「もっと」の否定的用法では、次の(52)～(54)のように「現在・現実・現場の状態」を「比較基準」とする例が多く見られる<sup>17</sup>。

(52) (四畳半の部屋を見ながら)

a:「あなたの部屋もこんなに狭いの?」

b:「いいえ、わたしの部屋はもっと広いです」(渡辺1996より)

(53)取材の記者やカメラマンが多いためこの広い場所で計量をするが、それ以外の試合の時はもっと狭い場所を使うのではないか。(一瞬)

(54)この写真は全然よくないけど、鈴木さんって実物はもっとすてきだよ。

以下の例も、文中に明示されているわけではないが、「現在・現実・現場の状態」を「比較基準」とするものである。

(55)順一、鏡に背中彫り物を映して見て、／順一「昔はもっと色艶が良くて張りがあったんだがなア……こいつも寄る年波には勝てねえか…」(泣き)

(56)=(23)「くそっ。なんだ、あのざまは。もっと勇ましくできないのか」ディレクターは舌打ちした。(筒井)

以上のように、「もっと」が「特定の値」を「比較基準」とすることは、次の(57)と(58)の比較からも明らかになる。(57)は「比較基準」が連続的なスケールを想定できる形容詞であり「特定の値」を示さないため許容されないが、(58)は「比較基準」が現場にある、或いは現在頭の中に描いている「特定の値」を示すため、可能になる。

(57)=(44)′ \*私が買ったのは、高い靴ではなく、もっと安い靴だ。

(58)私が買ったのは、あんな高い靴ではなく、もっと安い靴だ。

更に、次の(59)(60)も、形容詞が「比較基準」となる例である。

(59) (aが上の子のみを知っていてbもそのことを知っている場合)

a:お宅のお子さん、体格いいわねえ。

b:え?ああ。上の子は結構いい体格してるけど、下の子はもっと華奢なのよ。

(木下2001より)

(60) (不動産屋で)今ご紹介したお部屋は確かに狭いですが、次にご案内するお部屋はもっと広くて機能的ですよ。

(59)(60)は、話し手と聞き手が共通に認識している事柄を「比較基準」として、聞き手にとって

未知の事柄を述べるものである。このとき、共通に認識している事柄とは、現場に存在する値の定まった具体的な情報であり、それは「現在・現実・現場の状態」と同様に捉えられ、「特定の値」を表すと考えられる。このため、(59)(60)は可能になる。従って、次のように聞き手の判断を否定する場合などは、やはり「もっと」は用いられない。

(59)' (aがbの子どもを知っていてbもそのことを知っている場合)

a: お宅のお子さん、体格いいわねえ。

b: \*そんなことないわよ、あの子はもっと華奢よ。

以上のように否定的用法の「もっと」は、一定の程度の幅をもたない「具体的な事例の特定の状態」を〔比較基準〕とし、その値を否定して「こんなふう (そんなふう/あんなふう)ではなくて、もっとA」と述べる場合に用いられるということがいえる。

#### 4. 「否定的用法の『もっと』と「ずっと」について

なお、比較表現において用いられる「ずっと」は、「〔比較対象〕も〔比較基準〕もAという状態である」という前提が必要ないという点では、否定的用法の「もっと」と同じである。しかし、否定的用法の「もっと」は必ず〔比較基準〕の値が $\sim A$ となるのに対して、「ずっと」の場合〔比較基準〕の値はAであっても $\sim A$ であってもよい。

(61) a: 太郎と次郎とどちらの方が背が高いですか。

b: 次郎も高いですが、太郎の方が {ずっと/もっと} 高いです。

(62) a: 太郎と次郎とどちらの方が背が高いですか。

b: 次郎は低いです。太郎の方が {ずっと/\*もっと} 高いです。

また、両者は意味的にも全く異なる。「もっと」の否定的用法が「〔比較基準〕を否定し〔比較対象〕を適当な値として捉える」ものであるのに対し、「ずっと」は〔比較対象〕と〔比較基準〕の程度を比較し、その差が大きいことを述べるものである<sup>18</sup>。従って、「ずっと」は程度性のない語に係ることはできない。

(63) {\*ずっと/もっと} 他に方法がある。

#### 5. おわりに

以上、〔比較基準〕がAとなるか、 $\sim A$ となるかによって、「もっと」を「程度用法」と「否定的用法」に分類した。一般に「もっと」は程度述語を修飾するため、従来、程度の比較以外のものとして明確に位置づけられることがなかったが、本稿では、「程度用法」の「もっと」は〔比較対象〕と〔比較基準〕の程度の大小関係を述べるのに対し、「否定的用法」の「もっと」は、〔比較基準〕を否定し〔比較対象〕を適当な値として捉える、という意味を持つことを明らかにした。また、両用法はこのような意味の相違にとどまらず、以下に示すような構文、韻律においても違いが見られる。否定的用法の「もっと」が用いられるのは、〔比較基準〕が「具体的な事例の特定の状態」を表す場合である。

更に、「もっと」を含まない比較表現にも程度の大小関係を表さない用法があり、「もっと」の

「否定的用法」と同様の意味・構文的特徴を持つことを述べた。

#### ◎程度用法

- ・構文：[比較対象] は [比較基準] よりもっとA  
(或は, [比較基準] より [比較対象] (の方) がもっとA)
- ・韻律：「もっと」が被修飾要素より高いピッチ領域に実現する

#### ◎否定的用法

- ・構文：(～A (=比較基準) でなく) もっとA (=比較対象)
- ・韻律：「もっと」と被修飾要素がほぼ同じ高さのピッチ領域に実現する

#### 注

- 1 「YよりXをA」「YよりXにA」のようにXはガ格でない場合もある。
- 2 ただし, Aは必ずしも文の述語になるとは限らない。  
以下では比較対象には\_\_\_\_\_線, 比較基準には\_\_\_\_\_線, 程度の大小関係を表す場合には程度述語に\_\_\_\_\_線を引く。  
なお比較表現は, 量・頻度を含意する動詞を述語として量や頻度を比較したり, 相対性名詞を述語として相対的な位置関係を表したりすることもできるが, 本稿での主張においてこれらは程度述語と同様に考えられるため, これに含めて考えることにする。
- 3 西尾(1972), 仁田(1975), 益岡・田窪(1992), 渡辺(1995)参照
- 4 渡辺(1986), 佐野(1998)参照
- 5 本稿では「もっと」について述べるが, 「もう少し」にも [比較基準] を否定的に捉える用法があると考えられる。
- 6 実際, [比較基準] もAである, という前提があっても, [比較基準] に木下の言う「視点」がなければ不自然になることがある。  
a: 太郎と次郎は2人とも190センチ以上あるんだって。  
b: どっちが高いの?  
a: ??太郎のほうがもっと高いよ。
- 7 本稿では, このような程度の比較ではないものも含めて「比較表現」と呼ぶ。
- 8 [比較基準] の値がAか～Aかどちらと判断されるのか文脈から読み取れない文では, 「程度用法」と「否定的用法」の両方の解釈が可能になる。  
私は見凝めた。見凝めると, 却って霞んで行くその顔貌を, 私は記憶を素速く辿った。いや, 私はこの老人を知らなかった。彼は「神」だろうか。いや, 神はもっと大きいはずであった。(野火)
- 9 「もっと」を含む文で, 音調の違いがあることは, 服部匡先生のご指摘による。
- 10 被験者の出身県は群馬5人, 長野2人, 新潟2人, 東京, 北海道, 青森, 山形, 岩手, 福島が各1人である。
- 11 ただし, 逆に「～(の)ではなく」と一方を否定する文が, 常に「～より」という比較表現に置き換えられるというわけではない。比較表現が用いられるためには, 客観的な事実関係を表すのではなく, [比較対象] を適当なものとして捉えるという話者の価値判断が必要になる(川端2002参照)。

・コーヒーを注文したが、来たのはコーヒー {\*より/ではなく} 紅茶だった。(川端2002より)

・彼は教授として {\*より/ではなく} 助教授として迎えられた。

12 安達(2001)は(33)(35)(36)のような比較構文については「一方を否定する」意味を持つとは考えておらず、語順の変更についても触れられていない。

13 ただし、そもそも「XはYよりA」という比較表現自体、XとYは常に異なる値になることが前提になっており、否定的用法と程度用法は互いに連続的である。「太郎は次郎より親切だ」のように、Aが程度性のある語の場合には通常「程度用法」と解釈されるが、Aが程度性のある語の場合であっても、[比較基準]の属性が~Aで、「次郎のように不親切ではなく」という意味を持つ場合には一方を否定的に捉える意味を持ち、程度用法か否定的用法かあいまいになる。川端(2002)は、比較構文そのものが「相対的に不適切なYを否定的に捉える話し手の価値判断を内在する」と考えている。

これに対し、「もっと」を含む比較表現の場合には、[比較基準]の値がAと捉えられるか~Aと捉えられるかによってどちらの用法であるかが決まる。[比較基準]がAの場合は程度用法、[比較基準]が~Aの場合は否定的用法となる。

14 例えば、次の例では後者のほうが程度用法として解釈されやすい。

もっとゆっくり話してください。/今よりもっとゆっくり話してください。

ただし、以下のように「~より」という[比較基準]が表されても否定的用法として成り立つ場合もある。

犬は猫なんかよりもっと忠実だ。

15 否定応答の際用いられる「違う」も、一定の幅を持った程度を否定する場合には通常用いられない。

① a:彼は160センチくらいですか。

b:いいえ、違います。

② a:彼は背が低いですか。

b:\*いいえ、違います。

16 なお、以下のように、「もっとA」自体、第三者が体験している(体験した)状態である場合には、[比較基準]も第三者が体験している(体験した)状態となりうる。

この店の料理は今はおいしくないらしいけど、昔はもっとおいしかったんだって。

17 「現在・現実・現場の状態」とそれ以外の状態を比べる場合には、共に「実際に体験している(体験した)状態」であっても、「現在・現実・現場の状態」の方が[比較基準]になりやすい。

①この部屋は日当たりがよくないけど、はじめに見た部屋はもっとよかった。

②\*はじめに見た部屋は日当たりがよくなかったけど、この部屋はもっといい。

これは、「現在・現実・現場の状態」など話者にとってより身近な状態を[比較基準]とする場合には[比較基準]に対して非難や不満の気持ちが表れやすいが、それを[比較対象]とする場合には単に二者の状態を並べて述べているものとしか捉えられず、わざわざ「もっと」を使って[比較基準]を否定的に捉える理由がないためであると考えられる。従って、[比較基準]を否定的に捉えるなんらかの必然性がある場合には、「現在・現実・現場の状態」が[比較対象]で、それ以外の状態が[比較基準]になりうる。

②「あの店の料理、どう?」「昔はおいしくなかったけど、今はもっとおいしくなってるよ。」

cf. 「あの店の料理，どう？」「\*昔はおいしくなかったけど，今はもっとおいしいよ。」

18 佐野(1998)参照

#### 参考文献

- 安達太郎(2001)「比較表現の全体像」『広島女子大学国際文化学部紀要』第九号, 1-19  
奥村大志(1995)「「もっと」についての考察」『日本語教育』87号, 91-102  
川端元子(2002)「「離脱」から「転換」へー話題転換機能を獲得した「それより」についてー」『国語学』第53巻3号, 48-62  
木下恭子(2001)「比較の副詞「もっと」における主観性」『国語学』第52巻2号, 16-29  
窪菌晴夫(1998)『音声学・音韻論』くろしお出版  
佐野由紀子(1998)「比較に関わる程度副詞について」『国語学』第195集, 99-112  
西尾寅弥(1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版  
仁田義雄(1975)「形容詞の結合価」『文芸研究』79集  
益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法 改訂版』くろしお出版  
渡辺史央(1995)「日本語の比較表現についての一考察ー比較の基準と程度性についてー」『さわらび』4号, 65-75 神戸市外国語大学外国語学部益岡隆志研究室室内文法研究会  
—— (1996)「比較性程度副詞「ずっと」「もっと」「さらに」についての覚え書き」『さわらび』5号, 58-67 神戸市外国語大学外国語学部益岡隆志研究室室内文法研究会  
渡辺実 (1986)「比較の副詞ー「もっと」を中心にー」『学習院大学言語共同研究所紀要』8号, 65-74

#### 用例出典

(朝日)『朝日新聞』/ (安部) 安部公房『安部公房短編集』/ (太郎) 曾野綾子『太郎物語』/ (錦織) 宮本輝『錦織』/ (ポッコ) 星新一『ポッコちゃん』/ (孤高) 新田次郎『孤高の人』/ (トット) 黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』/ (亭主) 筒井康隆『亭主調理法』/ (青春) 石川達三『青春の蹉跎』/ (一瞬) 沢木耕太郎『一瞬の夏』/ (泣き) 松本功ほか『泣きほくろ』/ (筒井) 筒井康隆『筒井康隆短編集』/ (野火) 大岡昇平『野火』/ (ゾウ) 本川達雄『ゾウの時間ネズミの時間』/ (野の鳥)『野の鳥の生態・第一巻』/ (草) 福永武彦『草の花』/ (路傍) 山本有三『路傍の石』

付記：本稿をまとめるにあたり，三宅知宏氏より貴重なご意見をいただいた。また査読者の方からは細部にわたりご指導をいただいた。ここに記して感謝申し上げます。

(投稿受理日：2002年12月26日)

(改稿受理日：2004年2月3日)

---

佐野 由紀子 (さの ゆきこ)

群馬県立女子大学 文学部 国文学科

〒370-1193 群馬県佐波郡玉村町大字上手1395-1

sano@gpwu.ac.jp

# On the “negative usage” of *motto*

SANO Yukiko

Gunma prefectural women’s university

## Keywords

comparison expression, *motto*, negative usage, comparison criterion

## Abstract

Previously it was thought that comparative expressions which include *motto* express an unequal degree relation, because *motto* ‘more’ modifies words which relate to degree. However, there are cases where *motto* has a different function. In this paper, I classify the uses of *motto* into two types: 1) the “degree usage” and 2) the “negative usage” focusing on the comparison criterion used. While the “degree usage” expresses the relative difference between two sides, the “negative usage” denies one side and assigns a suitable degree to the other. In addition to these semantic differences, I also observed differences in the syntactic constructions and intonation (prominence) used in each type. These differences also influenced the conditions for using *motto*. Finally, I also observed comparative expressions without *motto* that did not express an unequal degree relation. I demonstrate that these cases share semantic and syntactic characteristics with the “negative usage” of *motto*.